東京都知事選挙 闘争に参加して

本所指導部　松岡大喜

その夜右翼暴力団は、車のうえから長い棒や竹ざおをふり回しながら「太田を殺せ」と、同候補めがけて襲いかかつてきた。2万人の都民の目の前で。

「太田を殺せ」と右翼

暴力に屈すればどうなるか

今回の統一地方選挙の大きな特徴の一つに、右翼による暴力・テロがあります。しかも多くの国民の目の前で行われています。

大牟田でも坪沼福岡県知事候補が、立会い演説中に襲われましたが、東京では都知事候補の太田薫氏に対する襲撃が行われ、同候補はそのため負傷したほどです。それは、三月三十一日四万人もの人の目の前で、共産党の宮本委員長が登山ナイフで襲われた直後、選挙戦最終日の四月七日のことでした。

右翼が立候補

まず、東京都知事立候補者十三人のうち、愛国党の赤尾敏をはじめ七人もの右翼、またはそれに近い人がいて、候補者車・宣伝車の認可を受け、選挙用の腕章をつけ選挙運動といって公然と選挙妨害をくり返しました。

太田候補のあとをつけまわし、軍歌を吹き鳴らし、アジ演説をぶち、聴衆や太田候補の車に向かって突っこんできました。

とくに当の七日など、朝は渋谷で昼は銀座で襲われました。銀座では太田候補は、せっかく同候補の演説を聞こうと集まった三千人の人たちに、ついに演説することができず帰りました。どこにもここにも右翼がまきれこんでいるありさまだったのです。

太田を殺せ

七日の夜――。

その夜動員された二万人に守られながら、新宿東駅口に着いた太田候補の車には、飛鳥田社会党委員長、上田共産党副委員長、中山千夏革自連代表、槙枝総評議長、青島幸男・市川房枝・上田哲各参議院議員が同乗していました。

午後七時過ぎのことです。右翼の車に先導され、そのまわりを守られながら鈴木都知事候補の車が現われました。

その車には大平総理、竹入公明党・佐々木民社党各委員長らが乗っていました。

そこへ、愛国党の武装したトラックをはじめ、右翼の宣伝車が七台も、「太田を殺せ」と叫び、サイレンを鳴らし、各車のうえから長いこん棒や竹ざおをふり回しながら突っ込んできました。

この騒ぎのなか、聴衆の間にまぎれこんでいた暴漢が、パチンコと思われる武器で狙撃したものと思われ、いきなり飛んできた石をかわしきれず、太田候補は眉間に負傷してしまいました。

それでも太田候補は、さいわい聴衆のなかに居合わせた一医師の手で治療を受けるとすぐ、また車にあがって叫び続けました。

「暴力には絶対に負けない」、「安全な東京都をつくろう」「革新都政を守ろう」

その叫びに、二万人の聴衆が、「太田」「太田」の連呼でこたえたのはいうまでもないでしょう。

そのかたわらで、右翼に守られた車のうえから演説する大平総理に竹入公明・佐々木民社両党委員長、鈴木候補の姿を、多くの国民はちゃんとその目で見たことと思います。

傷を負つてもなおマイクをはなさず、「革新都政を守ろう」と訴える太田東京都知事候補。

恐るべき現実

四月二十四日には元号法案が衆議院で通過し、さらに大平総理は東条英機元総理ら十三人のA級戦犯が、まったく国民が知らぬ間に合祀されていた靖国神社への参拝を強行しました。三月十一日以来三十日間、太田候補と行動を共にした私は、その後の大平総理の政治姿勢や動きを思うとき、日本の行く末が恐ろしくなりますが、とりあえず見たままの事実を報告しました。

×

右はすでにわかっていただけたと思いますが、先ほど行われた統一地方選挙の際、東京都知事選オルグとして派遣され、終始太田薫候補につき添って苦楽を分かち合い帰ったばかりの松岡大喜さんの貴重な報告です。今後のわが国の政治の動向について、きっと考えさせる点が多いのではなにでしょうか。

――編集部

北海道で災害続く

原因は明らかに合理化

合理化がいっきに強まった炭鉱では、三月以来死亡を伴う重大災害が続発しているが、その後も北海道で次のような死傷災害が起きている。

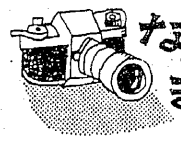
四月十六日、太平洋釧路炭鉱で運搬事故発生。仕繰工の成田信行さん（五十三歳）が死亡した。

次いで十九日、こんどは芦別鉱業所第一坑で発破災害が起き、下請工の佐藤政幸さん（四十歳）が負傷した。命に別状ないと伝えられているものの、左大腿部骨折、腹部・胸部・右腕に炭じんがはいっている重傷。

さらに二十一日には赤平炭鉱で運搬災害が発生。高橋武さん（四十五歳）が死亡している。

三池炭鉱でも重大災害が続発している事実とともに、災害原因が合理化攻撃と、それを強制する現石炭政策にあることは明らかだ。

なかま



▼…竹林博さん。三池港務所の貯炭係ひと筋に三十年。仲間の組合員が減っていくので、今彼の手のなかにある分会旗は退職後も、使命感の強い彼の手で守られていくことだろう。

親子二代の港務所勤務。父の退職後は両親、妻と四人の子供、実妹など九人の家族の生活がその肩に。「苦しいときは助け合い、はげまし合っていくのが夫婦でしょう」と妻のサヨさんが大島紬の手内職をして生計を助けてきた。

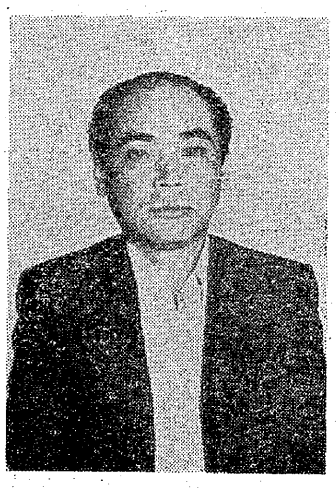
もとは、「黙って俺についてこい」式のワンマン亭主だった竹林さん。でも、三池闘争のなかで同志愛・労働者連帯の有難さを知り、人の和の大切さを知り、人柄ががらりと変る。親戚のない彼が母を亡くし、葬儀を営むのに途方にくれていたときのこと、同じ社宅に住む仲間が全員で、どれほど物心両面からささえてくれたことだったか。あげれば際限がないが、妻の献身とともに思えば胸をうつ。

今は、職場や地域の活動をただ黙々と、縁の下からささえるのになくてはならぬ存在に。そんな彼を、分会旗がきっとはげまし続けていくに相違ない。

余暇を見ては、指導部に手塩にかけて育てている盆栽をもってきて飾ったり、山手樹一郎の小説を愛読したりしている。

▼…大正十五年生れの五十三歳。勤続三十一年。五十歳の妻のサヨさんとの間に二男二女。早や五人の孫がいる。

港務指導部　竹林博



受給年齢を65歳に

年金抜本改悪狙う

懇談会が基本報告書

【連合】厚生大臣の私的諮問機関である年金制度基本構想懇談会（有沢広巳会長）は四月十八日、「わが国年金制度の改革の方向」と題する報告書を厚生大臣に提出した。

「長期的な均衡と安定を求めて」という副題の報告書は、①厚生年金の給付水準の維持は困難が予想され、共済年金も厚生年金なみの給付水準が望ましい。②厚生、共済、国民の各年金とも、被保険者の保険料負担は引き上げざるを得ない。③年金受給開始年齢は長期的に六十五歳とすべきだ。④国庫負担については定率制を改め、重点配分とし、財源として目的税の導入も検討する。⑤負担、給付の均衡を図るため各制度の部分的統合、統一機構設置を進めるなどが骨子。

この懇談会は一九七六年五月に設置、有沢会長ほか委員十一人（労働団体代表は二人だけ）、専門委員一人で構成され、厚相の公的諮問機関である社会保障制度審議会、社会保険審議会をさしおいて、「確実に到来する人口の老齢化に対応する年金制度の改革」について三十五回の論議をかさねてきた。その結果打ち出された〝改革〟は、現行年金の給付水準を、「欧米諸国の年金制度に比して遜色（そんしょく＝見劣り）のない水準」とたたえ、この程度の給付を維持するためにも「高負担」はやむをえないとする、働く国民にとっては〝改悪〟でしかない方向を示唆している。

とくに厚生年金男子六十歳、女子五十五歳、共済組合五十五歳の現行支給開始年齢を国民年金なみの六十五歳に引き上げ、自民党が〝官民格差〟と攻撃しつづけてきた共済年金の給付水準を厚生年金なみとする給付の低位平準化をめざす意図が露骨で、たださえ失業、再就職の困難、定年延長と引き替えの賃下げや退職金の値切りによって、老後の不安を深めている中高年労働者の怒りを大きくかき立てることになりそうだ。